

心に辿着くまで-小説「ピーティ」- 杉本 増生



1922年生まれのアメリカ人男性ピーティ・コービンが、70歳で没するまでの一代記です。といっても、彼自らが行った事跡は何一つありません。最重度の脳性麻痺者として生まれ、2歳で施設に預けられ、食事から排泄まで、生活の一切を手人に委ねなければならなかったからです。

当時は、脳性麻痺への医学的理解がなく、運動機能上で言語発声可能なら、短絡的に、知能面も同等だと考えられていました。たとえ、目の表情や、発声音や、腕や首の動作で合図しても、「条件反射」で片づけられてしまう。意思伝達の透視アルファベット(五十音)板など、思いも寄らない時代です。

そんな中で、知能や感情に異常がないピーティは、周囲の無理解、偏見、軽視、感覚的嫌悪等に耐えて、人間関係を拒絶された辛い生を生きて行きます。身体的苦痛と深い孤独の中で、時には、自分のベッド上を徘徊する鼠たちに愛情と慰藉を覚えながら。

この設定には、人が生きるとはどういうことか、二義的なもの一切を取り払った後の人間の本质とは何か、という問いが、重たく、深く、呈示されています。小説は二部から成り、第一部は、大多数の無理解の波間で邂逅した理解者(介護者)数人との交流を扱っていますが、彼(彼女)らは皆、それぞれの都合で離れていきます。そのたびに、ピーティの孤独と絶望は深まっていく。～「たとえ幸せな気分になれるとしても、これから先は、どんなにむずかしくても、だれかを好きになるのはやめよう。もうこれ以上傷つくのはごめんね！」というふうに。

第二部では、70歳になったピーティと男子高校生トレパーとの交流が描かれます。具体的な紹介は省きますが、ここで初めて、介護者とは別に、対等の人間同士としての関係が前面に呈示されます。

何の基準を以て(対等)と成すか? 年齢差や社会的地位や身体的能力とは別個に、素裸の心と心との関係に於いて対等、ということです。心が結ばれてこそその、この生を共に生きて行く仲間であり、作者はそれをさらに進めて「家族って……心の問題なんだ。家族は友達ともちがう。ピーティはぼくの心の中では、いつもおじいちゃんだった。いつもいっしょだったし、これからもはなれない」とトレパーに言わせます。こういう(心の家族)に看取られて、ピーティは息を引き取ります。

強直彎曲した身体で自ら移動かなわず、意思を伝える言語発声能力は絶無に近く、介護の手が無ければ生活できぬピーティの一生は、悲惨といえばこれほど悲惨なものはありません。けれども、心はそうではない。心を他者に伝え、相手の心に寄り合い、さらには刻印できるなら、人間の一生は意味があるのだと、作者はピーティの生涯を通じて、彼の苦悩とともにそう語りかけているに思われます。

私は、35年間の公務員生活中、後半の期間は、自らを活かすべく希望して、福祉畑で過ごしました。各種障がい者のデイサービス・相談業務から始まり、知的障がい者の通所更生施設の支援員を経て、生活保護のケースワーカーまで、不利な条件を負った人々やその家族と接してきました。生活に密着する種々の課題を関係機関の人たちと協力して解決すべく努めながら、いかに深く、豊かに、心との関係を築くかということに、ひそかに心を砕いてきました。(もともと、障がいの程度や内容によっては、その心を探りかねる場合もあり、それはそれで、また違った心組みと努力が必要でしたが……)

誤解し、誤解されもし、騙されもしながら、どれだけ自分の努力が功を奏したか? 傲慢な心の押しつけになっていなかったか? 人の心を安直にわかったような気になってはいなかったか? ……顧みて内心忸怩たるものがあります。そんな自分にとって、ある意味で人間の本質を深く抉り出したこの『ピーティ』は、胸を打ちました。

「重いテーマではありながら、これほど晴れやかで、すがすがしく楽しい物語には、一生にそう何度も出会えるものではありません。……なにがなんでも自分の手で訳して、たくさんの人にピーティと出会ってほしい! 読後の気持ちはただそれだけでした」

これほど晴れやかですがすがしく楽しいー多くの苦しい人々を目にしてきた自分は、まだこう言い切る自信はありませんが、とまれ、翻訳者、千葉茂樹氏の尻馬に乗って、私もまた、〈自立センター前穂〉と縁ある皆さんに、この一冊を勧めます。

『ピーティ』ーベン・マイケルセン作、鈴木出版(株)発行。(高槻市の図書館等に数冊あり)

前穂通信

まえほつうしん

発行日

2012年11月1日

発行元

自立センター前穂
〒569-1022
高槻市日吉台
1番町21-18
072-689-8600



シリーズ「きょうだいの思い」⑬ 学生時代③

2週間の施設実習の最終日、施設で生活を送る皆さんと写真撮影をした。

私の膝の上に座ってピースサインをする人、撮影を仕切る人、皆さん笑顔一杯で、やはり実習中にも感じていたように、積極的にアピールする人達ばかりが集まった(笑)写真撮影を終えてお別れする直前に、施設のグラウンドに咲いているタンポポの花を渡してくれた人がいた。この男性は、無口で物静かな人だった。気がつけばいつも熱い(?)視線を送ってきてくれた人である。タンポポを手に、目には涙が一杯だった。今でも、この時の光景を思い出すと込み上げてくるものがある。積極的に関わってくる人にか気持ちがいかなかった自分を反省した。

2週間の施設実習を終えて、障がい者と関わる仕事に就きたいという私の想いは弱くなった。実習で感じた様々なことは、若かった私には感情をうまく整理できなかつたり割り切ることができなかつた。卒業後、一般企業に就職した。障がい者と関わる仕事がしたいから...と進学させてもらった両親には申し訳なさもあったが何も言われなかつた。

「高い学費を払ったのに」と文句を言われてもいいぐらいである(笑)でも、何も言わないところに親の思いがあるように感じた。

